

私の幼児教育論（その二）



下山田裕彦

（一）

内村の高弟・矢内原忠雄（一八九三—一九六一）を通して、私
が学んだ聖書の思想の中心を一言で言うならば、「救の連帯」と
言つてよいのであろう。つまり、自分の救いには、他者の救いを
前提するものでなければ、真の救いにはならないということであ
る。

聖書の思想に触れるとき、確かに人は「自己充実」の喜びにひ
たることが出来るであらう。が、自己充実が持続し、真に徹底す

る為には、他者との共同の歩みや対話を必要とするのである。何
故なら、人は関係的存在とも言われる通り、他者の存在を肯定
し、前提条件としない限り、自分の存在はあり得ないからであ
る。つまり、自己充実が真の充実である為には、他者の充実にま
で及んでいかなければならないであらう。

倉橋の言う自己充実は、あくまでも自分の充実であって、その
意味では根の浅い充実概念であったと言つてよいのではなからう
か。

静岡大学附属幼稚園（以下「附属幼稚園」とのみ記す）で、私
が強く印象づけられることは、子どもの喜びや充実が子ども同志

の中で保障され成立している、ということである。つまり、子どもの自己充実、複数の子どもの存在が必要なのである。このことは私の幼児教育論の出発である。

だから、幼児の教育が一人一人の子どもの自己充実を保障することから出発しても、子どもの成長発達にしたがって、他人への関心をもつよう働きかけることが他人の充実を保障することにつながるのではなからうか。

附属幼稚園では幼児期の発達課題を研究テーマとして追求する過程の中で幼児期におこななければならぬことは、

I イ 他人へ依存している状態から自立して、自分で考えて行動できるようになる。

ロ 自分のことしか眼中にないような状態から脱して、他人の気持がわかるようになる。

II ハ 衝動的、断片的にふるまっていたのが、意図的、組織的になっていく。

ニ 一面的にしか捉えられない傾向が少なくなって、多面的になり、場面に応じた言動がとれるようになる。

（『幼児教育のあり方を求めて』研究紀要一九七七年・十三頁）
と云う。

自分をいつも主人公とする人間同志が対決し衝突しあっている今日の社会の中で、自分の人生を自分の力で切り開いていくことの出来る人間が、同時に、他人の気持がわかり、他人と共に生きる人間であることは今日的課題であるだろう。私はこれを自立と連帯の思想と呼んでいるが、この二つにして一つの思想は今日の社会を生きるわれわれにとって最重要な思想と言ってよいのではなからうか。

その意味で、私は附属幼稚園の実践を注意深く見守っている一人である。言うまでもなく、右に引用した幼児期の発達課題は自立と連帯の思想に支えられているからである。

私が今日このような考えをもつに至った要因の一つには矢内原を通して学んだ聖書の思想に触れたことにあるだろう。私はこのことをいつも心に留めて感謝の気持を持ちつつゆきたいと願っている。その場合、注意しなければならないことは矢内原の生きた時代と今日の時代は社会的背景も問題性も違っているということがある。だから、最終的には自分の眼で、正しく聖書を読むということが出来なければならないであろう。私の終生の課題と自覚している幼児教育の研究が今日の社会の動きから遊離したり、観念的になつたりしない為にも聖書のメッセージを正確に捉

える、ということが絶対に必要な作業である、と思つている。

(二)

私は前号で倉橋惣三に限りない親しみを持っている、と書いた。

昨年の保育学会の口頭発表から引用することにしよう。(於聖和女子大学)

「私には倉橋が一高在学中の若き日、内村鑑三の門をたたき、内村の人格的影響の下で、彼が幼児の教育と取り組み始めたという歴史的事実の中に限りなき親しみを覚えるものであります。つまり、私は倉橋を対象化できる立場に身を置きつつ、同時に、倉橋を内側から理解してみたいと思つております。換言するならば、彼の主張に虚心に耳を傾け、学ぶべきものを学び、激動する今日の社会の中で、倉橋の保育理論をどのように再評価すればいいのか、また、倉橋の保育理論をどう継承すればいいのか、という問題を考えてみたいのであります」

人格観念のきちつとした倉橋の保育思想から今日でも学ぶべきものは少なくはないだろう。特に、今日の社会にみられる人格観

念の希薄さがいろいろなところで問題を複雑にはしていないだろうか。

私が最近、身近なところで痛感していることを列挙すれば次の通りである。

一、権利だけを主張して、自分の義務を怠っている人
一、心情を無視して、筋道だけを優先する人

三、学問研究より政治的イデオロギーを優先させる人
例えば、このような人は著しく人格観念が欠落しているから、冷たく観念的であり、相手の立場を無視してはばからない。

このような人の保育研究とは一体なんであるのだろうか、私は常日頃疑問に思っているから、ハートの細やかな倉橋の保育思想を、今日の社会の中で、批判継承することは大切な課題であると思つている。問題は聖書の思想に照らして、倉橋の著作を読み直すということであろう。つまり、倉橋の保育思想に社会的性格を吹き込むことではなからうか。

附属幼稚園の教育目標の一つをもって言い直すならば「自分のことしか眼中にないような状態から、他人の気持がわかり、楽しくいっしょに生活できるようになる」と言うことになるのではなからうか。

この教育目標は「ねらい」として次のようなことを課題として

いる。

。附添いから離れて、嫌がらずに幼稚園へくる（三歳児）→
。教師と親しくなり喜んで幼稚園へくる→。仲良しの友だちが
ふえて幼稚園生活を楽しむ（四歳児）→。相手のことがわかり
喜ぶようなことをしてあげる→。皆で力をあわせて幼稚園生活
を楽しむものにしていく（五歳児）（『附属幼稚園教育課程』別表
から引用）

倉橋の言う自己充実を出発としながらも年齢と保育年数が進む
に従って、社会的視野が徐々に広がり、他人の気持がわかり、他
人と共に力を合わせて幼稚園生活を楽しいものにしていく、とい
う発達課題を研究成果の中から浮かび上げられている。

右に引用したねらいの一つ「皆で力をあわせて幼稚園生活を楽
しいものにしていく」ということを、次のように言い直してみる
ことにしよう。

。皆で力をあわせて家庭生活を楽しいものにしていく。
。皆で力をあわせて学校生活を楽しいものにしていく。
。皆で力をあわせて社会生活を楽しいものにしていく。
われわれの家庭生活の現実を直視するとき、そこには何と悲し
みや憎しみが支配していることであろうか。一家の柱を奪われた
り、重い知恵おくれの子どもの出生によって十字架を背負わされ

たりすることは珍しいことではない。

子どもの天分が引き出され、拡大される場所である学校生活
には点数絶対主義が支配し、教師の力量は問われなくて、子ども
だけがバカ者扱いされたりしている。

力を共に出しあって、難問を解決していかなければならない社
会生活は現実には権力者が弱者を踏みにかけている、と言ってま
ずまちがいないだろう。

それ故、共に生きるという連帯の思想の普及と浸透は家庭や職
場あるいは社会において、今日ほど緊急の課題として要請されて
いる時代はない、と言ってよいだろう。

(三)

私が矢内原忠雄から学んだ聖書の思想は、「救の連帯」である、
と書いた。このことをはっきりと理解できるようになったことは
最近のことである。長い間、矢内原の、あの激しかった戦中の戦
いの根源にあるものは一体何であったのかと私は思いめぐらして
きた。また、同じ内村の門下生でありながら、倉橋と矢内原の太
平洋戦争への対処の仕方が余りにも違いすぎていたその差がどこ
から生じてきたかを思いめぐらしてきた。

それは、保育学会でも度々指摘してきたように聖書の思想の受取り方に差があったのである。この問題を私はここでもう一度くりかえすつもりはない。ただここでははっきりと指摘しておきたいことは聖書の思想を肯定し、受入れ、聖書の思想を生きる者は個人の意志を越えて公的使命を担う者とされる、ということである。このように書けばはなはだ傲慢なこととお叱りを受けるであろうか。

矢内原の生涯を一貫して流れている特質の一つは彼が公的使命を自覚していたことであろう。具体的にどんなことを意味するか、東大総長退任の翌月、つまり昭和三十三年一月に記された「人生の転機」から引用しよう。

「私が大学を去るのは、自由と平和の理想が日本を去ることの預言的象徴ではないであろうか」

日本の平和と自由を守ってきた砦のごとき人間は矢内原一人だけだったのであるか、という疑問が提起されても不自然ではあるまい。言うまでもなく矢内原は日本の歴史に大きな足跡を残した代表的人物である。このことを十分承知しつつも、右に引用した言葉から受ける印象は強烈である。

聖書の思想を徹底して生きる者は、いと小さき者であってもこのような使命を自覚するのにならうか、と私は最近考えるよう

になった。

このような徹底した公的使命を生きた矢内原の根底にあったものは強烈な罪の自覚であった。恵子夫人は晩年の病床の矢内原の姿も次のごとく描いている。

「けれども主人の戦いはそれだけではありません。主人には霊と肉との戦い、悪魔、罪との闘争がありました。それは病気の苦痛にくらべられない何倍かでございました。ある時、私が病院にまゐりますと私の顔をみて涙を流しました。あの何者にも負けない勇者の主人が泣いておりました。かけ蒲団で顔をおおって泣きました」

これは深刻無比な世界である。私の存在が根底から音を立ててくずれていくような衝撃を覚える。

強烈な使命感と罪の自覚は二つにして一つである。

矢内原と倉橋を並べるとき、前者は植民政策を重視した経済学者であり、後者は幼児教育を専攻した心理学者である。だから、両者を比較検討することにはやや無理がある。にもかかわらず、両者の思想の内実を問うことは容易である。私はこの作業をやってみた。勿論、私自身の為である。

私の幼児教育論と題しながら、その基礎作業となるようなことを書いてきた。残された二、三の私の問題をスケッチしてしめくりとしよう。

まず、第一に、保育実践から謙虚に学びたいと思う。つまり、子どもと直に接しながら子ども自身から学びたいと思っている。

研究者の中には固定概念にしばられていて、固定的・観念的にしか子どもをみない人々が多いのではなからうか。デスク・ワークをしながら概念操作による論理の組立てだけでは保育の実践は旧態以前の教師中心主義をぬけだすことが出来ないのではなからうか。

第二に、保育内容に関わるテーマを一つ選んで実践してみたいと思っている。倉橋の言う「自己充実」が、「他者の充実」を保障することにつながっていくことが幼稚園の基本的課題ではないかという仮説を立てて、この仮説の真偽をたしかめてみたいと思っ

っている。

私達の住んでいるこの世界はあくまでも相対の世界である。だから、自分の立場を絶対化することは厳にいましめなければならぬ。それにもかかわらず、特定の政治的立場から問題を提起したり、特定のイデオロギーを学問の場に持ち込んだりすることが

ある。これは明らかに真実を生命とする学問的精神への挑戦である。だから、この相対の世界に身を置きつつ、理想を理想としながら真実を真実としながら、人間と社会の悪を私は問題にしてゆきたいと思う。

尚、私的なことではあるが母のことを書き添えておこう。母の仕事が私に継承したことに見えざるものの導きを感じるからである。

母が戦後、田舎で幼稚園を始めたのは私が中学生の時代である。長い間、無給で、小使いから園長の仕事まで一手に引き受け、苦闘していた日の母の姿を、私は今、その時の母の年齢に達していきいきと想い出す。大きな病気を二度もしながら一体、何が母を支えていたのであろうか。

その母は昨年暮、一人娘(姉)の死と対面し、悲しみに沈んでいた。

他ならぬ私が幼児教育を専攻することになったことを思う時、『私の幼児教育論』の根底にはこの母の無意図的な影響があったことを思っ

て感激を新たにするのである。

——了——
(静岡大学)